いただきます

R4.4.26_Tuesday_【心を育む生徒指導通信No1：通算44号】

作成者・教諭　花園修兵

新年度が始まりました。3月には3年生が卒業し、少し寂しい気持ちもありましたが、新入生の入学とともに、新生穴水高校には、にぎやかで新しい風が吹き始めています。別れがあり、また新しい出会いがあり、人はそうやって“いのち”をつないできました。皆さんに流れる“血”や“志”それらは何でつくられたものでしょうか。今回のテーマは「**いただきます**」です。『いのちをいただく　みいちゃんがお肉になる日』（講談社）の絵本を日本講演新聞が取り扱った内容から一緒に考えていきましょう。

この絵本の原案者である坂本さんは、かつて熊本市食肉センターの食肉解体作業員でした。この絵本では牛や豚を殺すことを“解く”と表現しています。

ある日の夕方、一頭の牛を載せたトラックが、食肉センターに入っていきました。車が止まると、助手席から10歳ぐらいの女の子が車を降り、トラックの荷台に上ると、牛のお腹をさすりながら言いました。
「みいちゃん、ごめんねぇ・・・みいちゃんが肉にならんと、お正月がこんて、じいちゃんの言わすけん。みいちゃんば売らんと、みんなが暮らせんけん。ごめんねぇ・・・」
坂本さんは「見なきゃよかった」と思いました。
トラックの運転席から、女の子のおじいちゃんが降りてきて、坂本さんにこう言います。
「この娘はみいちゃんと一緒に育ち、ずっと家に置いておくつもりでしたが、みいちゃんを売らないと、家の生活が苦しいのです。明日は、どうぞ坂本さん、よろしくお願いします」・・・
それを聞いた坂本さんの思いは揺れ、「やっぱり無理だ」と心に決めて家に帰ります。
家に帰り、この話を小学3年生の息子に話すと・・・息子は「心のなか人がしたら、牛が苦しむけん。だから、お父さんがしてやんなっせ」・・・と言いました。
それで翌朝、坂本さんは仕方なく牛舎へと向かうのでした・・・

坂本さんが近づくと、みいちゃんは、他の牛がするように角を下げて、坂本さんを威嚇します。
前日とは全く様子が違います。
坂本さんは、みいちゃんに声を掛けながら一歩ずつ近づきます。
「みいちゃんが肉にならんと、みんなが困るけん。ごめんよ・・・」
話しかけてくうちに、みいちゃんの表情はだんだん穏やかになっていきました。
牛の命を解く時、ピストルのようなもので急所を撃ちます。
急所が外れると、牛が苦しんで暴れるそうです。
坂本さんは、みいちゃんの目をじっと見つめて言いました。
「みいちゃん。じっとしとけよ。絶対動くなよ・・・」
みいちゃんの動きがピタッと止まり・・・
みいちゃんの目から一筋の涙がこぼれました・・・
坂本さんは、牛が泣くのをはじめて見ました。

後日、あのおじいちゃんがやって来て坂本さんに言いました。
「昨日、みいちゃんの肉を少し譲ってもらって食べようとしました。孫は食べないんです。だから私は言いました。みいちゃんに『**ありがとう**』と言って食べてやれと。すると孫は泣きながら『みいちゃん、**いただきます**・・・おいしかぁ、おいしかぁ・・・』と言って食べてくれました。」
坂本さんは言います。「いのちは一つです。そのいのちを私たちはいただき、次に生かしていくのです」と。

皆さん、どうですか？　今日のお米を自分で作りましたか。魚を自分で釣ってきましたか。野菜を自分で育てましたか。これまでいただいてきたもの全てに“いのち”があり、そのいのちのおかげで私たちは生かされています。だから毎日、その感謝の気持ちを込めて、両手を合わせて、命を「**いただきます**」と言える人間でありたいですね。